〈研究資料〉

絵入り幸若舞曲「八島（下）」・「敦盛（下）」（大阪市立美術館蔵）

知念　理

はじめに

室町時代に流行した語り物芸能である幸若舞の正本（テキスト）は台本としてだけでなく、読み物としても広く親しまれた。その題材は武家の盛衰を語る軍記や英雄人物の一代記などが多い。御伽草子とともに絵巻にも仕立てられ、桃山～江戸時代になると、いわゆる奈良絵本（絵入り冊子本）が盛んに制作された。慶長～寛永年間頃に絵入り古活字版、続いて三十六番による整版本（『舞の本』）が刊行され、その後も人気の曲が新刻されるなど相当な需要があった。

当館には江戸初期制作とみられる絵入り本「八島」、「敦盛」（いずれも下のみ、細見良氏寄贈）が所蔵されており、令和二年度のコレクション展「ラブリー！ジャパン」（七月一日～八月十六日）で初公開した。絵入り幸若舞曲の系譜を考えるうえで貴重な作例と認められ、本誌上で改めてその概略について紹介を試みるものである。

一　「八島（下）」

当館所蔵の「八島（下）」（以下大美本という）は、袋綴の横本一冊で、表紙（縦一七.三×横二四.四㎝）は紺紙、朱紙題簽に「屋し満　下」の外題が墨書されるが内題はない【図1】。料紙は二十七丁で、半丁に概ね十二行書写され、挿絵前後には散書きをまぜている。挿絵は見開き二図、半丁五図で計七図を含む。当初とみられる表紙には経年劣化による折皺が多数発生し、詞書料紙も手ずれによる変色や汚れの付着が目立つが、挿絵各画面は顔料の剥落や焼けも少なく良好な状態を保っている。第一丁表に「如雲烟」（白文長方印）、「立斎」（朱文長方印）、第二十七丁裏に「鳥羽田氏蔵書之印」（朱文方印）、「如蘭」（白文長方印）の鑑蔵印【図2】・【図3】が計四顆おされるが、各印の使用者については未考である。

大美本に含まれる挿絵計七場面はそれぞれ以下の通りである。(1)

【図4】能登殿と義経が八島の磯で名字名乗を交わして対峙する

【図5】弁慶が尼公と嫁たちに八島での佐藤兄弟の戦いぶりを語る

【図6】能登殿の矢に射られて兄の次信が落馬し、その首を取りに飛び出す能登殿の舎弟・菊王丸を弟の忠信が矢で射る

【図7】長刀をかついだ弁慶が平家方に攻撃を仕掛け押し返す

【図8】義経、弁慶、忠信らに囲まれて次信が最後の時を迎える

【図9】弁慶が兄弟の死を語り終え、尼公らに形見の品を手渡す

【図10】平泉へ迎えられた義経は新造の館で手厚くもてなされる

幸若舞曲「八島」の主要な絵入り写本としては、大美本も含めて次の（1）～（10）の諸本があげられる。[2]

（1）**大和文華館蔵**　　**絵巻（大本改装）**　　**二巻**

（2）**ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵（スペンサーコレクション）**　　**絵巻**　　**二巻**

（3）**大阪市立美術館蔵**　　**絵本横本（下のみ）**　　**一冊**

（4）**個人蔵**　　**色紙（大本改装）**　　**十六枚**

（5）**広島・某寺蔵**　　**絵本大本**　　**二冊**

（6）**屋島寺蔵**　　**絵巻（大本改装）**　　**一巻**

（7）**海の見える杜美術館蔵**　　**絵本大本**　　**二冊**

（8）**国立国会図書館蔵**　　**絵巻（大本改装）**　　**四巻**

（9）**広島大学図書館蔵**　　**絵本大本（下のみ）**　　**一冊**

（10）**オックスフォード大学ボドリアン図書館付属日本研究図書館蔵**　　**絵巻**　　**二巻**

諸本は挿絵の性格から大きく二つのグループに分けられる。室町時代以来の「八島」祖本の挿絵を踏襲する系統である（1）大和文華館本、（2）スペンサー本、（3）大美本と、古活字版、ないしは寛永整版の影響下にある挿絵を有する他の諸本の系統で、後者はバリエーションが多様である。

（4）個人本については、泉万里氏による詳しい紹介がある。[3]古活字版の挿絵と密接な関係を指摘し、画風的に狩野光信にごく近く、慶長十三年（一六〇八）を下らない時期の制作と位置付ける。また（1）大和文華館本、（2）スペンサー本、（6）屋島寺本との比較も交え、中世後期の物語絵画の享受者層拡大という視点から幸若舞曲「八島」の絵画化を読み解く。また、宮崎もも氏は（1）大和文華館本の挿絵の特色として、分割、羅列的な構成と、屋台建築、松樹などの稚拙味ある形状をあげ、これらが広く十六世紀の絵巻、絵本の新趣向に通じることから、（1）大和文華館本が絵入り版本の直接的影響を受けていない古様な系統に位置付けられることを確認した。[4]

泉氏、宮崎氏が作成された図様対照表を総合的に整理し、（3）大美本と諸本の対応関係を示したのが別掲〈**表2**〉である。各挿絵場面に便宜的にNo.A～Nを付した。挿絵の場面内容は宮崎氏の表記をできるだけ踏襲した。

（3）大美本の挿絵は、まずその横本という画面体裁からも古活字版や寛永整版の挿絵に直接依拠して制作されたものとは考えにくい。そしてその第一図である挿絵場面A「能登殿と義経、名字名乗を交わす」は、従来知られていなかった珍しい場面である【図4】。[5]このあと詞章は、佐藤兄弟の屋島浦での奮闘を弁慶が尼公らに語って聞かせる物語の山場（挿絵場面B～E）へ差し掛かるが、この四場面に関する挿絵の性格が諸本の系統をグループ分けする大きな目安となる。

先述のように（1）大和文華館本、（2）スペンサー本、（3）大美本が一つのまとまりをなす。いずれも挿絵場面B「次信、能登殿の矢に射られて落馬」と同D「船より出た菊王丸を忠信が射る」を異時同図するのが特色である【図6】（カラー口絵2）。[6]しかも詞章に忠実に、次信が「馬手」（右手：画では馬の向こう）に落馬する（次信の姿が一部隠れる）図様ではなく、「弓手」（左手：画面で

は馬の手前）に落馬する（次信の姿がよく見える）図様となっていることに注意したい。

この三本以外では異時同図はみられず、同Ｂ「次信、能登殿の矢に射られて落馬」が、詞章どおり「馬手」へ落馬する図様をとって単独で場面化されるようになる。同Ｄ「船より出た菊王丸を忠信が射る」の割愛が進み、同Ｅ「能登殿、菊王丸を船に投げ入れる」が新たに場面化される。こうした場面構成の転換は、後述のようにおそらく古活字版刊行が契機と推測される。

あるいは、挿絵場面Ｊ「義経らに見守られつつ、次信亡くなる」でも、（1）大和文華館本、（2）スペンサー本、（3）大美本は、義経が次信の頭を膝にのせて寄り添うという、詞章に沿った図様ではなく、具足を着したまま戸板に寝かされた次信を義経、弁慶らが囲む図様をとる（屋内外の違いはあり）【図8】。また同Ｌ「弁慶、悲しむ尼公に形見を渡す」についてもやはりこの三本では、弁慶からの形見渡しではなく、一同が悲嘆する図様を共通して示す【図9】。物語末尾の同Ｎ「平泉の邸における義経・弁慶たち」の挿絵場面【図10】があることを確実視できるのもこの三本に限られる。

このように、概ね（3）大美本の挿絵は古様な「八島」の系統を引く（1）大和文華館本、（2）スペンサー本に近い性格を有し、古活字版および寛永整版から直接的な影響が及んでいないことがわかる。と同時に（3）大美本の挿絵には、（1）大和文華館本、（2）スペンサー本にはみられない、過渡期作例としての変異的特徴もいくつか指摘できるだろう。

註6でふれたように、挿絵場面Ｂ「次信、能登殿の矢に射られて落馬」と同Ｄ「船より出た菊王丸を忠信が射る」を異時同図する挿絵は、（1）大和文華館本、（2）スペンサー本では義経が名字名乗する詞章を挟んだ位置にあり、詞と絵の対応関係としては絵が先行しすぎ（前寄り）のきらいがあった。これに対し、（3）大美本では同Ａ「能登殿と義経、名字名乗を交わす」【図4】、さらに同Ｃ「話を聞いて涙にくれる尼公と嫁たち」【図5】を新たに場面化し、弟の忠信に能登殿の舎弟・菊王丸が射られ、倒れ伏すまでを語る段に詞章が達した後に、ようやく異時同図の第三図【図6】を挿入する。佐藤兄弟の奮戦にもまして義経一行の動向をフォーカスする挿絵構成の志向がうかがえる。

（3）大美本の挿絵場面Ｃ「話を聞いて涙にくれる尼公と嫁たち」【図5】を唯一、共有するのが古活字版である。上述のように異時同図の挿絵を第三図へ後退させた（3）大美本では、詞章と挿絵場面の時間的な混線が気にかかるようになったが、古活字版は同Ｂ「次信、能登殿の矢に射られて落馬」の単独場面化と、同Ｄ「船より出た菊王丸を忠信が射る」の割愛によりその混線をすっきり解消させたと読めるだろう。寛永製版ではさらに挿絵場面の整理が進み、同Ｃ「話を聞いて涙にくれる尼公と嫁たち」は割愛されてしまう。

また（3）大美本には、（1）大和文華館本、（2）スペンサー本にはなかった、挿絵場面Ｆ「弁慶が平家方へ押し出し奮闘する」【図7】が入っている。（5）広島・某寺本、（6）屋島寺本と、後発の（10）ボドリアン本にみられるが古活字版にはなく、普及範囲、年代が限られる場面であろう。

続いて大美本の表現的特徴をみておきたい。

水面は群青をたっぷりと塗り、諸所に淡褐色を薄くはいてハイラ

イトを与える。水波は胡粉の線描でニュアンス豊かにあらわされ、誇張された波頭で水面に動勢を与える。甲冑は各部を構成する素材をかたどる輪郭線、色の塗り分けも丁寧になされ、人物像の身体性を十分に確保している。面貌は一般兵士では引目鉤鼻の没個性的なタイプがほとんどであるが、主役級の武将では髭や髪の生え際が丁寧に描かれ、目尻をつり上げて引き締まった表情をつくる【図11】。寛永期の風俗画にみる実人的な生々しさはまだ感じられない。弁慶のみ、ぎょろっとした黒眼が入り、薄黒い肌をもつ異形にあらわされる【図12】。

また、画面の上下にはしるパターン化された水色のすやり霞は上下端に淡褐色を薄くはいて陰影をつけ、二〜三重の白線で外郭をくくる。霞、雲形は金銀箔を左右に切り分けて置き並べる素朴味ある加飾が特徴的である。著しく記号化した松樹、緑青と淡褐色を帯状に交互に重ねて表される岩山などとともに、次節で述べる「敦盛」の（2）須磨寺本にこれらとごく近似した表現感覚がみられる点は注意される。

これら絵画的な表現への印象と、先述の挿絵構成の分析を総合的に考えるならば、大美本の制作は少なくとも寛永整版刊行に前後する江戸初期（元和年間頃）と推察される。挿絵場面C「話を聞いて涙にくれる尼公と嫁たち」【図5】、同N「平泉の邸における義経・弁慶たち」【図10】に描かれた金銀地の朝顔図屏風・襖や、次節で述べる「敦盛」の挿絵場面Q「法然について出家する直実」に描かれた総金地の萩図壁貼付【図17】は、奈良絵本独特の簡略化からたまたま生じた趣きというよりも、桃山〜江戸初期に流行した単一モチーフによる大画面作品への認識を共有する絵師の画作とみなされる。(7)

二　「敦盛（下）」

当館所蔵の「敦盛（下）」（以下大美本という）は、袋綴の横本一冊下で、表紙（縦十七.三×横二四.四㎝）は紺紙、題簽を欠失しており内題はない。料紙は二十二丁で、半丁に概ね十二行書写され、挿絵前後に散書きをまぜている。挿絵は半丁のみ七図で見開きはない。表紙には経年劣化による折皺が多数発生し、詞書料紙も手ずれによる変色や汚れの付着が目立つが、挿絵各画面は顔料の剥落や焼けも少なく良好な状態を保っている。前節の「八島」同様に、第一丁表に「如雲烟」（白文長方印）、「立斎」（朱文長方印）、第二十二丁裏に「鳥羽田氏蔵書之印」（朱文方印）、「如蘭」（白文長方印）の鑑蔵印が計四顆おされる。

大美本に含まれる挿絵計七場面はそれぞれ以下の通りである。(8)

【図13】敦盛の遺骸を届けにきた熊谷直実の使いに平家が応じる
【図14】直実の使いの船上で敦盛の遺骸を確かめ嘆き悲しむ平家
【図15】遺骸を囲み嘆き悲しむ平家の船上で直実の書状が読まれる
【図16】直実は都に上り、獄門に晒された敦盛の首を盗み持ち去る
【図17】直実は黒谷の法然上人のもとで出家し、蓮生房と名乗る
【図18】敦盛の菩提を弔うため、直実は都を出て高野山へ向かう
【図19】直実は高野山の蓮華谷に庵室を結んで念仏修行する

幸若舞曲「敦盛」の主要な絵入り写本としては、大美本を含め次の（1）〜（7）の諸本があげられる。(9)

（1）京都府立京都学・歴彩館蔵　絵本横本　二冊
（2）須磨寺蔵　絵巻（横本改装）　二巻

（3）内藤記念くすり博物館蔵　絵本横本（上のみ）　一冊
（4）大阪市立美術館蔵　絵本横本（下のみ）　一冊
（5）聖徳大学川並記念図書館蔵　絵巻　二巻
（6）海の見える杜美術館蔵　絵本大本（下のみ）　一冊
（7）ホノルル美術館蔵　絵本大本　二冊

（2）須磨寺本については、問屋真一氏による詳しい紹介がある。[10] 問屋氏は、ホノルル美術館本を除く右の絵入りの「敦盛」諸本を詳細に比較検討し、幸若流の詞章をもつ（1）歴彩館本、（2）須磨寺本と、大頭流の詞章をもつ（3）内藤くすり博本の挿絵には寛永整版からの影響が認められず、これらが室町時代以来の「敦盛」祖本の絵を踏襲する系統（＝非寛永整版系）と位置付けられるとして、諸版本を含む絵入り本「敦盛」の系譜を俯瞰している。

挿絵場面の異同をまとめた問屋氏による一覧にもとづき、（4）大美本と諸本の「敦盛（下）」の対応関係を示したのが別掲〈**表3**〉である。行論の関係上、（上）に含まれる挿絵場面も付加した作例がある。また挿絵場面の内容は問屋氏の表記をできるだけ踏襲した。

（4）大美本の挿絵は、やはりその横本という画面体裁からも寛永整版の挿絵そのものに直接依拠して制作されたものとは考えにくいだろう。挿絵場面Q「法然について出家する直実」【図17】、同T「高野山に向かう直実」【図18】をみると、寛永整版のそれぞれ第一〇図、第十一図との相関性は希薄であることがわかる。同Q「法然について出家する直実」では、高い俯瞰視点から堂舎の屋根まで描き、壇上には袈裟を着して岩座に立つ金身の僧形像（地蔵菩薩か）を描く（4）大美本に対し、寛永整版では如来坐像がまつられた堂舎の内部を低い俯瞰視点からズームする図となっており、両者の相違は歴然としている。（4）大美本の同v「庵を結ぶ直実」【図19】も、寛永整版では同W「往生を遂げる直実」（第十二図）として場面化され懸隔がみられる。

また（4）大美本では第一図に、敦盛の遺骸を届けにきた直実の使いの舟に平家方が応じる挿絵場面★「敦盛の遺骸が届く」【図13】を入れるが、寛永整版はこの場面を含まない。[11]

この挿絵の前後の流れを非寛永整版系で見てみると、（1）歴彩館本では挿絵場面K「敦盛の首実検」（上・第六図）から同O「直実の書状に感涙する平氏」（下・第一図）までの間は詞章だけが相当の分量にわたって続く。そして（2）須磨寺本では、この長い詞章の間に、同M「屋島に上陸する平氏」（下・第一図、本来見開きの挿絵で右丁欠か?）が挿入されるようになる。絵入り本としてビジュアル性を向上させる目的で新たな場面化が志向されたものとみられ、（4）大美本では同★「敦盛の遺骸が届く」（第一図）がその機能を果たしていると解釈される。

この一方で、（4）大美本の他の挿絵に目を転じると、挿絵場面R「清水寺で敦盛を回向する直実」と同S「天王寺で敦盛を回向する直実」がなく、同P「敦盛の首を盗む直実」【図16】が入るという構成には、むしろ寛永整版系よりの性格もうかがえるのである。さらに、この同P「敦盛の首を盗む直実」【図16】や、同N「敦盛の遺骸に涙ぐむ平氏」【図14】、同O「直実の書状に感涙する平氏」【図15】をみると、モチーフ構成の密度や細部の図様は異なるが、寛永製版の挿絵（第七・八・九図）と全く無関係とは考えられない感覚の情景化がみられ注意される。

（4）大美本「敦盛（下）」の挿絵の絵画的な表現は前節で述べた「八島（下）」によく一致している。両冊はさらに曲数が揃った同一セットの「舞の本」から出たものである。室町時代の絵巻作例から続く横本絵入り写本の終末期に位置するこうしたレベルの作例が、やがて成立する寛永整版「敦盛」の挿絵形成に一定の影響を及ぼしたのではないかと推察される。[12]

おわりに

以上、当館所蔵の絵入り幸若舞曲「八島（下）」、「敦盛（下）」の紹介を試みた。両冊の挿絵の分析、表現からはおよそ元和年間頃の制作と推察され、版本刊行前後における絵入り幸若舞曲の系譜、展開を考えるうえで貴重な作例と認められる。

本稿をなすにあたり、大美本以外で実見できた作例は、「八島」は（1）大和文華館本（「忠信次信物語絵巻（八島絵巻）」）と、（7）海の見える杜美術館本（「舞の本絵本」のうち）、そして「敦盛」は（6）海の見える杜美術館本のみである。ご高配をいただいた各御所蔵に深謝申し上げるものである。一方、古活字版「八島」（龍門文庫蔵）ほか、諸本の内容理解については、註にあげた先学諸氏の記述、指摘におうところが大きい。稿者の理解不足に起因する誤認について大方よりのご叱正をお願いするものである。

また、大美本「八島（下）」の詞章は幸若流（註1）、一方、同「敦盛（下）」の詞章は大頭流（註8）であった。同一セットのなかで曲による詞章の系統違いといった問題はいかに解釈すべきなのだろうか。管見に入っていない関係作例の存在等とあわせ大方よりのご教示をまちたい。

註

1　大美本「八島」（下）の詞章は「源平鳴りを静めて名字、名乗をたしかに聞く。…」で始まる。麻原美子、北原保雄校注『新日本古典文学大系五九　舞の本』所収「八島」、四一五頁三行目。
なお別掲〈**表1**〉のように、大美本「八島」の詞章は幸若流に分類される「京大一本」にごく近い。京大一本、内閣文庫本、寛永整版の詞章は、それぞれ以下の翻刻を参照した。
（京一）松本孝三「八嶌」、『幸若舞曲研究　第四巻』所収「資料編」、三弥井書店、昭和六十一年。
（内閣）浅野英雄「八嶋」、『幸若舞曲研究　第九巻』所収「注釈篇」、三弥井書店、平成八年。
（寛永）上掲・麻原、北原校注『同書』所収「八島」。

2　ここで列記した作例のほかさらに、大阪青山歴史文学博物館本（三巻）、甲子園学院美術資料館（久米アートミュージアム）本（二巻）の存在が知られている。以下により、これまでに確認されている諸本が総覧できる。
小林健二①「『舞の本絵巻』の制作をめぐる諸問題－付、幸若舞曲の絵入り本一覧稿（増補改訂）」、『国文学研究資料館紀要文学研究篇』第四十三号、平成二十九年。同②「幸若舞曲の絵入り本一覧　序言」、『絵解く戦国の芸能と絵画―描かれた語り物の世界』所収、三弥井書店、令和二年。
なお、寛永整版は絵のない古活字版の詞章を覆刻し、絵入りの古活字版の挿絵を統合再編して寛永年間初めに成立したとされ、人気の曲はその後に新刻本も刊行された。麻原美子『幸若舞曲考』、新典社、昭和五十五年。小林健二③『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』所収「第四篇　幸若舞曲―絵画的展開」、三弥井書店、平成十三年。
泉万里「幸若舞曲「八島」とその絵画」、『大和文華』一一三号、平成十七年。その他諸本については以下を参照。なお後出〈表2〉における挿絵の数え方についてもこれら文献のなかでの表記に従った。

3　（1）大和文華館本
宮崎もも「忠信次信物語絵巻（八島絵巻）」、『国華』一四三四号、平成二十七年。徳江元正「『嗣信物語・忠信物語』解説」、『大和文華』六六号、昭和五十五年。

（2）スペンサー本
『在外奈良絵本』・グラビア№10「屋島尼公物語」（解説二一・二二）、角川書店、昭和五十六年。
https://digitalcollections.nypl.org/search/index?utf8=%E2%9C%93&keywords=yashima#（上巻のみ）
（4）個人蔵本　上掲　泉「同論文」
（5）広島・某寺本
五條小枝子①「奈良絵本『やしま』（仮題）考―画図の展開を中心として―」、『広島女子大学国際文化学部紀要』新輯第一号、平成七年。同②「奈良絵本『やしま』（仮題）―解題ならびに翻刻―」、『広島女子大学文学部紀要』第二八号、平成五年。
（6）屋島寺本
麻原美子「在外「舞の本」をめぐって」、『日本女子大学紀要』三三号、昭和五九年。『特別展 源平合戦とその時代』・図版№56「屋島物語絵巻」、香川県歴史博物館、平成十五年。
（7）海杜本（「舞の本絵本」のうち）
『特別展 幸若舞曲と絵画―武将が愛した英雄たち』・図版№Ⅰ－26、海の見える杜美術館、平成三十一年。
（8）国会図書館本（『八嶋』）
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288494
（9）広大本（「やしまのさうし」）
http://opac.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/dc/kyodo/naraehon/research/25/
（10）ボドリアン本
辻英子編著『在外日本重要絵巻撰・影印編／研究編』所収『やしま』、笠間書院、平成二十六年。
○古活字版（龍門文庫本）
前掲註（2）小林③『同書』、上掲・泉「同論文」、上掲（5）広島・某寺本の五條①「同論文」。
○寛永整版（東大附属図書館・霞亭文庫本）
http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/cgi-bin/gazo.cgi?no=92&top=1
○藤屋伊兵衛版（国立国会図書館本）
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539669

4 前掲註（3）「（1）大和文華本」の宮崎「同論文」。
5 この挿絵場面は、海と浜、平家方と源氏方の位置を左右逆転させる（10）ボドリアン本、能登殿と義経の対峙をズームした構図を創案する藤屋伊兵衛版などに引き継がれている。
6 泉氏、宮崎氏それぞれの図様対照表では、（1）大和文華館本、（2）スペンサー本には挿絵場面2「次信、能登殿の矢に射られて落馬」の場面は「なし」とチェックされるが、両本には弓を射た能登殿と落馬する次信が同一画面に描かれている。この挿絵が挿入される前後の詞章は（3）大美本の詞章冒頭に近い、まだ義経が名字名乗を終えたところで、能登殿が弓を射る前である。その後さらに時間経過した出来事である挿絵場面D「船より出た菊王丸を忠信が射る」のみの図と解釈するよりも、両場面の異時同図と解釈したい。
7 大美本「八島」の【図5】・【図10】に繰り返される朝顔は、物語空間に漂う無常やはかなさを象徴しようとする意図を持つ表現とも考えられる。小林健二氏は、海の見える杜美術館蔵「舞の本絵本」（本論で列記した「八島」の諸本中（7）海の見える杜美術館本）のなかの「満仲」の一場面を版本挿絵と比較して、庭の籬に朝顔が盛んに描く様子を描写した絵師の創意を指摘している。前掲註（2）小林①参照。
8 大美本「敦盛」（下）の詞章は「平家は、元暦元年二月七日に一の谷を落ち、…」で始まる。麻原美子、北原保雄校注『新日本古典文学大系五九 舞の本』（岩波書店、平成六年）所収「敦盛」、二二一頁一行目。
9 これまでに確認されている諸本の総覧は、前掲註（2）小林①②「同論文」参照。
10 問屋真一「絵入り幸若舞曲『敦盛』について―新出の須磨寺本絵巻を中心に―」、『神戸市立博物館研究紀要』第三十二号、平成二十八年。その他諸本については以下を参照。
（1）歴彩館本
http://www.archives.kyoto.jp/websearchpe/detail?cls=152_old_books_catalog&pkey=0000000169
（3）内藤くすり博本
http://www.eisai.co.jp/museum/information/facility/archive/49927/thumbnail01.html
（5）聖徳大本
前掲注（3）辻『同書』所収『敦盛』。

（6）海杜本（「舞の本絵本」のうち）
『特別展 幸若舞曲と絵画―武将が愛した英雄たち』・図版№Ⅰ－13、海の見える杜美術館、平成三十一年。
（7）ホノルル本
上：https://art.honolulumuseum.org/objects/28897/nara-ehon-atsumori-jo?ctx=cdaa01f5-bab4-462e-860c-a0816f6ac04b&idx=5
下：https://art.honolulumuseum.org/objects/52909/nara-ehon-atsumori-ge?ctx=cdaa01f5-bab4-462e-860c-a0816f6ac04b&idx=7
恋田知子「江戸前期の幸若舞曲絵巻・絵本の制作－「大織冠」と「敦盛」を例として－」、『絵解く 戦国の芸能と絵画―描かれた語り物の世界』所収、三弥井書店、令和二年。
○寛永整版（東大附属図書館・霞亭文庫本『敦盛』）
http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/cgi-bin/gazo.cgi?no=61&top=1
○承応三年版（国会図書館本『敦盛』）
原本代替請求記号ＹＤ－古－６５２３（マイクロ）
○本問屋版（国会図書館本『敦盛２巻』）
https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539634

11 （7）ホノルル本、明暦四年版本では、この場面に関して新たな図様を展開しており、狭義の寛永整版系諸本とは挿絵制作の構想に変質がうかがわれる。（7）ホノルル本の挿絵については前掲註（10）「（7）ホノルル本」の恋田「同論文」、明暦四年版本の挿絵については、宮腰直人「舞の本『敦盛』挿絵考－明暦版と本問屋版を中心にして－」（『文化現象としての源平盛衰記』所収、笠間書院、平成二十七年）の考察がある。

12 前節で述べた「八島」には寛永整版の挿絵の直接的源泉となる古活字版が存在するが、「敦盛」については水谷不倒『古版小説挿絵史』に存在が言及されるのみで再確認されていない。前掲註（2）小林①②「同論文」、③『同書』参照。

〈表1〉

№	諸本	詞章
1	大美	おなしけの三まいかふとに、たつかしらすへたるを、いくひにめされ、
	京一	同けの三枚甲に。たつかしらすへたるを猪くびにめされ。
	内閣	同し毛の五枚甲にくわかたうつてたつかしらすへたるを、猪くびにめされ
	寛永整版	同じ毛の袖、五枚甲に鍬形打つて竜頭据へたるを、猪首に召され、
2	大美	はうくわんは、なをかたつてきかせよかしとおほしめし、
	京一	判官は猶もかたつてきかせよかしとをほしめし。
	内閣	判官、不便におほしめし、「猶もかたつてきかせよかし」とおほしめし、
	寛永整版	判官、聞召されて、「猶も末を語って聞かせよ」と思し召し、
3	大美	おとゝのたゝのふこのよしを見るよりも、いや〳〵あにのくひをへいけかたへわたしては、あしかりなんとおもひ、
	京一	おと〳〵の忠信此よしを見るよりも。いや〳〵兄のくひを。平家かたへわたしては。悪り南と思ひ。
	内閣	忠信、此由見るよりも、兄のくひを平家方へ渡してはあしかりなんと存し、
	寛永整版	忠信、この由見るよりも、「兄の首平家方へ渡しては、弓矢の恥辱ぞ」と思ひ、
4	大美	はうくわん、むさしをめされ、此辺にあふしうのたゝのふやある、くしてまいれ、とありけれは、むさしうけたまはり、おつとこたへて御前をたつ、
	京一	判官むさしをめされ。此邊にあふしうの忠信やあるぐしてまいれ。武蔵承り。をつとこたえへてをまへおたち。
	内閣	判官、武蔵をめされ、『奥州の忠信はいつくにあるそ。くして参れ』、『承る』と申て、御前をまかり立、
	寛永整版	判官、武蔵を召され、「奥州の忠信は、いづくにあるぞ。具して参れ」。弁慶承て、御前を罷り立ち、
5	大美	たゝのふする〳〵とよつて、御では大事にましますか、心は何とましますそ、いかに〳〵と申とき、
	京一	忠信、する〳〵とよつて。御手は大事にましますか。心は何とましますぞ。いかに〳〵と申時。
	内閣	忠信する〳〵とよつて、『いかに嗣信、心は何とましますそ。御手は大事に候か。いかに、〳〵』と申す。
	寛永整版	忠信あまりのうれしさに、する〳〵と走り寄り、「御手は大事にましますか。心は何と御入候ぞ」。
6	大美	かまくらのこん五ろかけまさは、とりのうみの弥三郎にゆんてのまなこをいさせ、そのやをぬかておりかけ三日もちてまはり、
	京一	かま倉のごん五郎景當は。鳥海の弥三郎に。弓手の眼をゐさせ。其矢をぬかでおりかけ。三日もちてまはり。
	内閣	かまくらの権五郎景正は、とりのうみの弥三郎にゐられ、其矢をぬかておりかけ、三日もちてまはり、
	寛永整版	鎌倉の権五郎景政は、厨河の城にて、鳥の海の弥三郎に弓手の眼を射させ、其矢を抜かで折り懸け、三日三夜持って廻り、

〈表2〉

※Wは見開き

No.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
	能登殿と義経が名乗を交わす	次信、能登殿の矢に射られて落馬	話を聞いて涙にくれる尼公と嫁たち	船より出た菊王丸を忠信が射る	能登殿、菊王丸を船に投げ入れる	弁慶が平家方へ押し出し奮闘する	義経、次信の捜索を命じる	忠信と共の者、次信を捜索し、重症の次信を発見	次信を戸板に乗せて義経のもとへ運ぶ	義経らに見守られつつ、次信亡くなる	次信の埋葬	弁慶、悲しむ尼公に形見を渡す	関所	平泉の邸における義経・弁慶たち
1 大和文華館本		第一五・一六図（上） 異時同図 弓手に落馬 W		第一五・一六図 異時同図 W				第一七図（下） 第一八図	第一九図 第二〇図	第二一図 戸板に寝る		第二二・二三図 形見渡しなし W	第二四図	第二五・二六図 W
2 スペンサー本		第一図（下） 異時同図 弓手に落馬		第一図 異時同図				第二図 第三図	第四図	第五図 屋外で陣幕あり 戸板に寝る		第六図 形見渡しなし	第六図	第六図
3 大美本	第一図（下） W	**第三図** 異時同図 弓手に落馬 堂や松なし W	第二図 悲嘆の仕草なし	**第三図** 異時同図 堂や松なし W		第四図				第五図 屋外 戸板に寝る		第六図 形見渡しなし		第七図 義経と二婦人
4 個人蔵本		第七図 第八図 W			第九図 第一〇図 W		第一一図	第一二図	第一三図	第一四図	第一五図	第一六図		
5 広島・某寺本		第一六図（下） 第一七図 W			第一八図 第一九図 W	第二〇図 （左丁欠） W		第二一図 第二二図 W	第二三図	第二四図	欠？	欠？	欠？	欠？
6 屋島寺本		第九図 W		第一〇図	第一一図	第二二図 第二三図 W か？	第一四図	第一五図	第一六図	第一七図	第一八図			
7 海杜本		第六図（上） 海・浜が逆 W			第一図（下） 海・浜が逆 W				第二図	第三図 屋外で陣幕 戸板に寝る	第四図 太夫黒を囲んで悲嘆	第五図 W		
8 国会図書館本		第一図（三） W			第二図 W				第一図（四）	第二図	第三図	第四図		
9 広大本		第一図（下） W		第二図 W					第三図	第四図	第五図	第六図		
10 ボドリアン本	第一図（下） 海・浜が逆				第二図 海・浜が逆	第三図			第四図	第五図 屋外で陣幕 戸板に寝る				
古活字版		第六図 W	第七図		第八図 W		第九図	第一〇図	第一一図	第一二図	第一三図	欠？	欠？	欠？
寛永整版		第六図 W			第七図 W				第八図	第九図	第一〇図	第一一図		
藤屋伊兵衛版	第三図 W							第四図 W						

〈表3〉

※　Wは見開き
　　オは帖の表
　　ウは帖の裏

№.	挿絵場面	K	L	★	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	v	W
1	歴彩館本	敦盛の首実検 第六図（上）	書状をたくす直実	敦盛の遺骸が届く	屋島に上陸する平氏	敦盛の遺骸に涙ぐむ平氏	直実の書状に感涙する平氏 第一図（下） W	敦盛の首を盗む直実	法然について出家する直実 第二図 オウ	清水寺で敦盛を回向する直実 第三図 W	天王寺で敦盛を回向する直実 第四図 W	高野山に向かう直実	大塔に参拝する直実 第五図 左	＋庵を結ぶ直実 第五図 右	往生を遂げる直実
2	須磨寺本	第六図（上）			第一図（下） 右丁欠か？		第二図		第三図	第四図 W	第五図 オウか？ W	第六図　右		第六図　左 第七図か？	
3	内藤くすり博本	第六図（上） W	第七図												
4	大美本			第一図（下）		第二図	第三図	第四図	第五図			第六図		第七図	
5	聖徳大本	第六図（上）				第一図（下）	第二図	第三図	第四図			第五図	第六図		
6	海杜本					第一図（下）	第二図	第三図	第四図			第五図	第六図		
7	ホノルル本	第一図（下）		第二図		第三図 ※使いの舟に乗ったところ	第四図	第五図	第六図					第七図	
	寛永整版	第六図				第七図	第八図	第九図	第一〇図			第一一図			第一二図
	明暦四年版			第一図（下） 第三図					第四図	第五図					
	本間屋版						第三図（下） W		第四図				第五図		

図 3

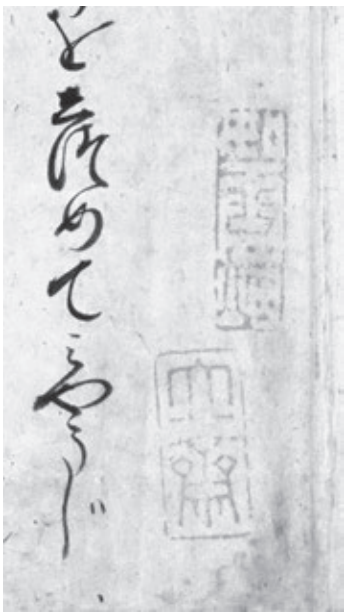

図 2

図 1

図 4　八島（下）第一図

図 4　八島（下）第一図

図 5　八島（下）第二図

図６　八島（下）第三図

図６　八島（下）第三図

図７　八島（下）第四図

図８　八島（下）第五図

図 9　八島（下）第六図

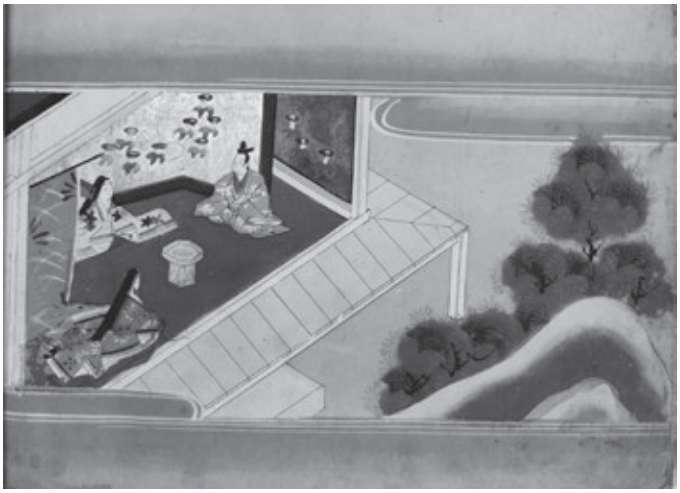

図10　八島（下）第七図

図11

図12

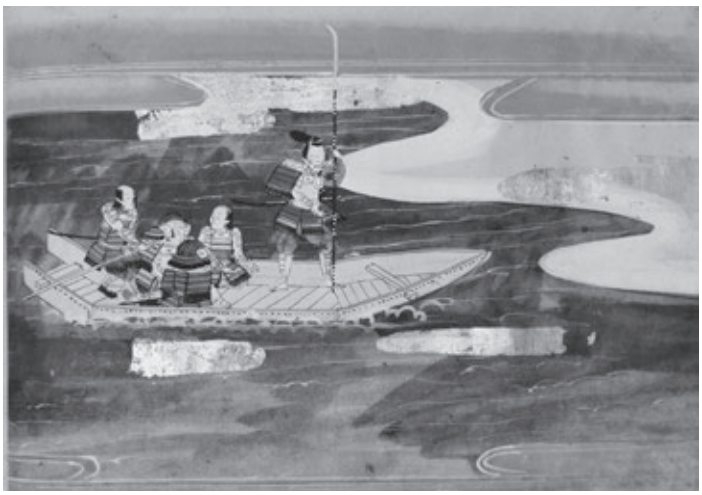

図13　敦盛（下）第一図

図14　敦盛（下）第二図

図15　敦盛（下）第三図

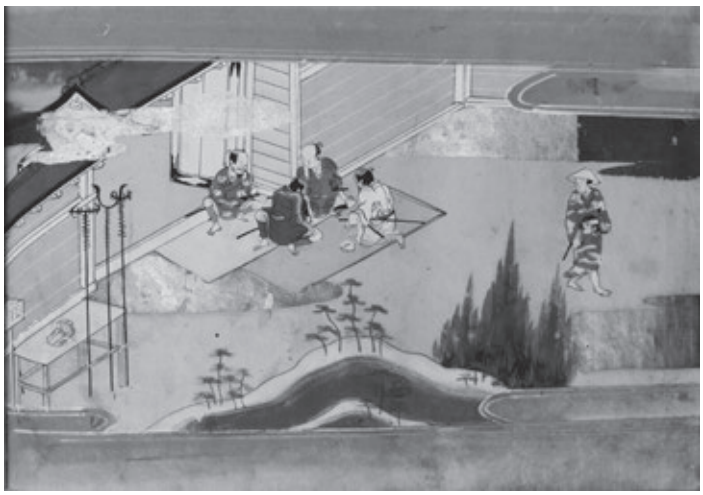

図16　敦盛（下）第四図

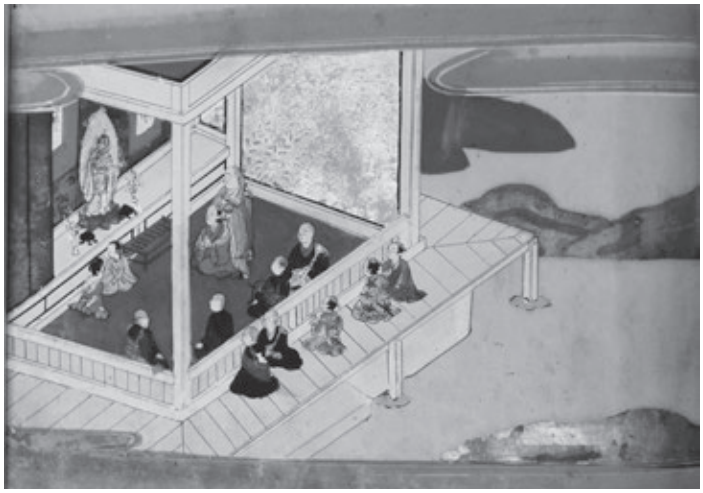

図17　敦盛（下）第五図

図18　敦盛（下）第六図

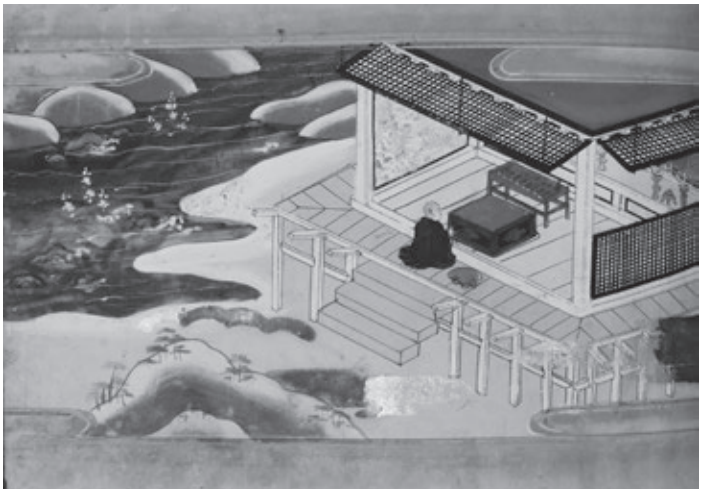

図19　敦盛（下）第七図